

CONFIDENTIAL

GHQ, SCAP
INFORMATION AND EDUCATION SECTION

高橋史朗

NDUK

Policy and Programs Unit

TO

CIE

THRU

Colonel, Information Division

SUBJECT

; War Guilt Information Program

歴史戦 WGIP

ウオーリー・ギルト・インフオメーション・プログラム

「日本人の道徳」を取り戻す

1. Herewith first (rough) draft of a c/n to p-2 (c/n) tracing the history of CIE's war guilt information program, proposing a new plan.

a. Phase One - from late 1945 to early 1946.

b. Phase two - from early 1946 to the present.

3. A third phase is recommended, embodying information and other activity to counter certain attitudes or suspected attitudes of the Japanese people in regard to the atom bombing of Hiroshima (and Nagasaki), the ultra-nationalistic testimony of Tojo at the war crimes trials.

4. This is a c/n that outgrew itself in the process of writing, and summarizing; hence, if the Chief of CIE considers it too long for it is recommended that this draft be returned with directions to the to extract the summaries contained in paragraphs 3 and 4 and carry the inclosures.

5. It will be noted that on pp. 6 and 8 there are blue-pencil corrections, "EDUCATION (COMING)." This material will be submitted on 9 p. in order to catch up with the c/n by the time it reaches the desk of Chief, CIE.

1 Incl.

Draft of subj c/n

D. W. G.

公益財團法人
モラロジー研究所

はじめに

本書は平成二十五年四月から三年間、月刊誌『MOKU』に連載した拙稿「もう一つの『菊と刀』」をテーマ別に整理修正し、加筆したものである。

筆者は昭和五十五年から三年間アメリカに留学し、占領下の検閲文書が保管されているメリーランド州立大学大学院で学びながら、米国立公文書館所蔵の連合国軍総司令部（GHQ）の民間情報教育局（CIE）文書の研究に没頭した。

翌年一月に車でアメリカ大陸を横断して、トレイナーCIE教育課長補佐の個人文書が保管されているスタンフォード大学フーバー研究所に移り、トレイナー文書とCIE文書のすべてをマイクロフィルムとマイクロフィッシュの形で購入して明星大学に持ち帰った。同大学では戦後教育史研究センターを設立（初代センター長は児玉三夫学長）し、紀要『戦後教育史研究』に研究成果を発表してきた。

昭和五十九年に発足した臨時教育審議会（中曾根政権下の政府の教育審議会）の最年少の専門委員に就任し、約三年間、総理府で毎週三時間開催された教育改革論議に参加した。委員の中でも教育学者は私一人であつたため、いじめ問題等の当面の教育課題に対する見識を問わ

れることが多くなり、時代の要請に応えるために「臨床教育学」の研究を余儀なくされ、後に

『臨床教育学と感性教育』を出版した玉川大学の大学院でも「臨床教育学」を教えるようになつた。その後、松下政経塾の講師や入塾審査員をしたことが契機となり、「師範塾」を東京、埼玉、大阪、福岡に設立し、さらに学級崩壊を機に「親学推進協会」を立ち上げ、教師と親の人間教育に取り組んできた。

歴史研究者から教育実践・研究者に転身したわが人生に大きな転機をもたらしたのは、平成二十四年四月に「親学推進議員連盟」が設立された直後に、「親の愛情不足が原因で発達障害になる」というトンデモ学説を「親学」が説いているという誤報・誤解が一気に広がり、後退を余儀なくされたことにあつた。

「ピンチはチャンス」と考え、占領史研究の原点に帰れという天の声と受けとめ、同年十二月から在外占領文書の調査研究の再スタートを切つた次第である。『MOKU』の連載は、この新たな調査研究の生々しい成果を報告したものである。

研究のメインテーマは「ウォード・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGI-P）」で、二十年以上前に拙著『検証・戦後教育』で詳述したが、当時の文書公開の制約から、これを裏づける原史料はCIE文書の中の三十九頁分に限定されており、米政府の対日心理戦略との連続性の中とらえることができなかつた点に限界があつた。

WGI-Pをリードしたブラッドフォード・スミスやボナー・フェラーズの関連文書や、彼らが所属していた戦時情報局（OWI）や戦略諜報局（OSS）の文書、OWIの外国戦意分析課の主任として対日心理戦略の基礎理論を構築したジェフリー・ゴーラーと、彼がその後任者にしたルース・ベネディクトの文書が、英サセックス大学、米ヴァツサー大学で次々に公開され、WGI-Pの源流や策定過程の実証的研究が可能となつた。

また、英国立公文書館所蔵の機密文書や英米の情報機関がソ連の暗号を解読したヴェノナ文書等の公開によつて、ソ連の工作員・協力者が明らかになり、中国における日本兵捕虜洗脳教育がWGI-Pの実践モデルとなつたことが判明した。

さらに、こうした在外文書の調査研究と並行して、ユネスコ「世界の記憶」南京大虐殺文書の登録を決定したアブダビでの国際諮問委員会へのオブザーバーとしての参加や、米加の各地に設置された慰安婦像のすべての現地調査を行つてきた。本書では、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、アトランタの領事館主催のタイムテーブルで現地のアメリカ人に慰安婦問題や邦人子女いじめ問題について話をする機会を得たことなど、国際的「歴史戦」の貴重な経験を踏まえた論稿も加えさせていただいた。

戦前と戦後の教育を二項対立的にとらえ、教育勅語や修身教科書を「軍国主義」と同一視して、一方的に断罪する風潮がいまだに続いている。戦後七十年を経ても政治家の教育勅語

発言自体がマスコミから袋叩きに遭う、異常な「閉ざされた言語空間」の中に私たちは置かれている。

戦前の言論統制に似た状況に今も私たちが置かれているのは一体何故なのか。教科書問題、靖国参拝問題、慰安婦問題、朝鮮人戦時労働者（徴用工）問題はすべて「反日日本人」が火をつけた「日本発」の「歴史戦」である。こうした歴史認識問題の根底に、「日本人の伝統的な国民道徳＝軍国主義」と洗脳したＷＧＩＰがあつた事実を、史実に即して正確に認識する必要がある。

この洗脳計画の思想的・実践的源流を解明し、米軍の対日心理作戦の延長線上で作成されたＷＧＩＰの策定経緯と実態を明らかにすることによって、今もなお私たちを拘束し続いている洗脳から脱却し、日本人の道徳を取り戻したい。

紙面の都合により、連載原稿を大幅に削除せざるをえなかつたが、発見した史料の報告を羅列するだけでは、研究現場の生々しい臨場感が伝わらないので、思い出などを日記風に綴つた原稿も紙面の許す限り残すこととした。最後に、本書の出版にあたつて格別のご尽力をいただいたモラロジー研究所出版部の安江悦子氏に謝意を表したい。

平成三十年十一月二十日

高橋史朗

目 次

はじめに 1

序 章 在外文書調査研究の旅へ

初心の場所へ	12
複眼的研究の誓い	19
ヴァイニング夫人の機密文書	27
旅先での出会い	33

第一章 「伝統的軍国主義」という共同幻想

発見された岸本英夫日記	40
はめ込まれた「義眼」	52
「文明の衝突」に屈しない力	59
日本人の「国民性」のとんでもない誤解	65
「日本人の性格構造」分析会議	73

偏見のプロパガンダが事実になるとき——戦後史を研究する意味 81

第二章 ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムの策定経緯

戦争犯罪キヤンペーンの始まり	92
日本に浸透した占領軍の価値観	100
日本人洗脳計画（W G I P）の原点	106
ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムの源流	114
米「初期の対日方針」から「日本人の再方向づけ」へ	122
対日心理作戦との連続性——フェラーズとスミスの文書	128
「太平洋戦争史」と「南京大虐殺プロパガンダ」との接点	136

第三章 ベネディクトとミアーズの比較考察

日本研究の態度	142
ミアーズへの冷評	150

「公平な正義」とは何か 160

160

日本文化論『武士の娘』が解いた“誤解” 170

170

第四章 天皇の「人間宣言」をめぐる攻防

新史料で浮かび上がる“攻防” 182

伝統精神尊重の原点を明示した昭和天皇 192

第五章 アメリカにおける「歴史戦」

アメリカで本格化する中韓の日本叩き
朝日譲報の国際的影響とIWG報告書 211 204

嘘は反論しなければ真実となる 215

219

慰安婦碑設置に見る米国・反日包围網の実態 219

眞実なき議論に塗り固められ、狹まる反日包围網 229

229

アメリカに広がる日本人差別の実害 237

第六章 ユネスコにおける「歴史戦」

冤罪裁判史料が「世界の記憶」に 246

和訳されない史料が国際論争の論拠に 254

大失態の日本外交——中国の政治宣伝が世界記憶遺産に 264

「秘密作戦」に一杯食わされた日本外交——歴史的敗北を繰り返すな 274

歴史的対立を開拓する交響的創造——包括的視点で事実の提示と確認に徹する 283

終章 ユネスコ「世界の記憶」の最新動向に関する一考察

第二〇一回ユネスコ執行委員会文書（国際諮問委員会進捗報告書） 293

申請案件への予備的勧告と応答——「政治的案件」に対する二重基準 296

共同申請文書の三分類の問題点 302

ユネスコ憲章と米議会調査報告書 303

共同申請文書の具体的問題点 309

共同申請の技術的問題点 313

装丁——レフ・デザイン工房 神田程史

*カバー写真＝米国立公文書館所蔵のGHQ民間情報教育局(CIE)文書に含まれているWG一〇関連の原史料で、一九四八年一月八日のWar Guilt Information Programを主題としたメモ。

序 章 在外文書調査研究の旅へ